

末黒野

すぐるの

6月号 (通巻874号)



木の芽

風絡む崖裾の道姫すみれ
葡萄パンのぶだうびつしり垣芽吹き
稚のもの白く干されて木の芽垣
木の芽張る杜を従へ神輿庫
掬へばすぐ指より零る春の水
畳み来る春の波斯くことば欲し
色違ひの平皿二枚春愁
春愁や黄味の片寄る茹で卵

松本
（名譽主宰）
三千夫

初つばめ

生かされて生きる幸せ雛祭
土雛の年代経たり木曾の宿
句作まだととのはぬ日の陽炎ひぬ
夕東風や潮目濃き日の駅に立つ
春菜畑の二つ返事の良き子かな
遠くきて清瀬の郷や初つばめ
惜命の句碑よむ清瀬草萌ゆる
風まぶし人のまぶしとのどかなる
海よりの風やはらかや花の昼
男の子生る天へ峙つ松の芯
もしもしと歩くスマホや花の下
桃活けて指の痛みを口にせず

黒滝志麻子

(主宰)

桜東風

森

清

(副主筆)

堯

梅三分木橋の先の美術館
上りきる汐汲坂や風光る
予定なき午後の堤や水温む
漂うて音なく池へ春落葉
ひと啼きに憂さを押しやる初音かな
薔薇の芽の艶を深めて朝日影
富士まとふ雲影の袈裟涅槃西風
軍港にひびく喇叭や桜東風
鶯や島の要の切通し
鏡池の光たつぷり花馬酔木
総門より奥へ奥へとさくらかな
奉納の雅楽昂り花の昼

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

春の雨

安齋久英

降りやまぬ日すがらの雨二月果つ
いとけなき初音背山を二度三度
春雨や模糊と上総の崎の光
春浅し雲が雲追ふ明けの空
荒東風や波立ち上る安房上総
流れ藻の汀にからび水温む
春雷や五体ゆさぶり去りゆきぬ
朱の鳥居くぐるや突と春の雷
指先に春を集むる流れかな
薄紙にまなこ透くるや雛納め

箏曲ライブ

石黒興平

きらきらと遡上の魚影春の川
飾り釜据ゑたる茶房春浅し
鎌倉や虚子の余寒と出会ひたり
島一つ風除けにして若布刈舟
覚め初むるものにやさしく春の雨
梅園の箏曲ライブ人寄せて
白加賀てふ梅に翳ありひかりあり
三月や一気に花舗の華やぎぬ
結納の口上確と春障子
ひび割れの金剛力士春の塵



紅梅

岡野里子

春きざす三角屋根の艶めく朱
道路工事遅々紅梅のほつほつと
梅が香の幟百旒源氏池
唐門へ落つ紅椿白椿
下萌や殿下光臨記念の碑
掌に結ぶ春光稚眠る
旭光と荒き風受け花ミモザ
小余綾の磯を打つ波春北風
町川の漂ふ芥鳥曇
一湾に居並ぶ艦や鳥帰る

春曙

田中臥石

笛鳴きの藪へ目を遣る郵便夫
横須賀は確と軍港霞みけり
雛の間の句座や上総の沖に雲
蹴球の逸れて被写体梅の花
妻はしき春曙の九十九(つくも)髪
春秋と違ふ憂ひや恙妻
小さくなるははの残像彼岸墓地
三月の姉の死津波の忌なりけり
変りゆく言語や梅の花匂ふ
マネキンのやうに被りぬ春帽子

菜の花

森清信子

菜の花や一村を染め風を染め
薄氷のすつと流れぬ日を弾き
小綬鶏や三和土の小さき藁草履
洗ひても野の香土の香露のたう
風おちて闇の迫り来春の月
絹雨の土のやはらか梅の里
古井戸の網よりのぞき冴返る
日を追はぬ水仙海の風まかせ
早天をゆさぶる鴉声春寒し
駅弁の角に丸まり蓬餅



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



春の水

及川照子

竹林を抜けて真青や春の水
一筆の硯に落とし春の水
顔中で笑ふみどり児雛の日
廻れまはれ水子地藏の風車
本を読む刻は忘我や春の雨
青き踏み身ぬちの力よみがへる
はみ出さぬ事身上にすみれ草

春北風

岡田史女

ものの芽を促す雨や実朝忌
梅真白水面は光ちらしけり
菜の花や二反歩ほどの休耕区
啓蟄の夜ふけて雨のつるかな
浚渫の船の行き交ふ春北風
初桜手のひら湿りおびてきし
はらからの恋しき日なり桃の花

空耳

小田嶋野笛

春寒や鳥目の犬を抱き入れて
浅草は今もお江戸や梅の寺
治叢酒の空耳賜ふ功德かな
課税なき身となり久し二月尽
一寸のしらおに五分の背鱈かな
春禽の影を離すや風の中
酒星や言葉少なく返盃し

針 供 養

加藤 静江

足踏みしてお祓ひを待つ針供養
白鳩の群るる神木遅き春
奉献の酒樽高し木の芽張る
河童塚 筆塚 高し梅 真白
春愁や空より深き海の藍
庫裡うらに三桎の花開き初む
岩のごと残る樹形や銀杏の芽

地 虫 出 づ

菅野 日出子

露天湯や落ちて来さうな春の月
風呂吹のほろりと崩れ若狭箸
紺碧の空や引く鳥群れなして
丘を背の馬頭観音 風光る
竹林のかそけき葉擦れ地虫出づ
雨あとの瑠璃の玉置く犬ふぐり
春シヨール妣に似て来し二重顎

春

斉藤 マキ子

春節の街やはふはふ小龍包
スポイトの乳吸ふ子猫名をもらひ
孫悟空乗つてゐさうな春の雲
朶して朧の夜を区切りけり
春燈や蝶のかたちの封緘紙
麦青み大地の起伏顕るる
車座のなかに土筆の二三本

山 躑 躅

堺 昌子

満開の桜の下や靴の音
異国人の銅像多し花の下
菫咲く四阿の辺の池の鯉
湧き水の底まで透くる花の風
一山の紅をつくして山躑躅
川釣りや鶯の声途切れ勝ち
水車小屋梨の花咲く道つづき

初 蝶 高木邦雄

初蝶や渡る水面の影あえか
素謡の羽衣もるる春障子
屋形船春の隅田に灯を零す
下萌や放たるる駒嘶きて
囂しき春禽抱く楠大樹
寅さんの転ぶ堤や草萌ゆる
満を持し一氣に開く辛夷かな

梅が香 今村千年

実朝の海荒ぶともちやつきらこ
梅が香を乗せて捨て舟軋みをり
梅が香を纏ひてをりぬ車椅子
山風や梅の遅速のおのづから
春雨やまだ覚めやらぬ野の仏
突として籬の隅に露の臺
いつしかに少女明眸雛の客



青炎集

黒滝志麻子選

横須賀 大川暉美

探梅や風の硬さを解かぬ谷戸
磴を来て眺望展け梅真白
朝市へ曳く荷や桶の桃の花
渡し船春の光の水脈曳けり
海の色広ぐる畦や犬ふぐり
暖かや野を子ら走り声走り

横浜 山口 登

横浜 外山節子

北風を避け銀座通りに空車待つ
苗札のカタカナの名を復唱す
弦の音に耳傾けて春の宵
引く潮に返せ戻せと望潮
鋭角に鳥の声飛ぶ竹の秋
春眠の抜けぬ五感や枕抱く

横浜 和田慈子

三角の出窓の日差しシクラメン
春昼や気愈く回る観覧車
晩学の書棚に隙間春寒し
送りゆき送り返され春の宵
横浜の三塔めぐり小鳥引く
とりどりの彩にこの家の芽吹きかな

横浜 太田良一

新色の口紅えらぶチューリップ
涅槃西風頬打つ砂の由比ヶ浜
耳元に風切る羽音春の鳶
寺に鳴るグランドピアノ庭籠
囀や人をたづぬる広報車
切株の藁にある月日かな

支柱得て満を持したる臥竜梅
老梅の枝の撓へる力かな
観梅や耳順の人を先頭に
古民家のくすぶるゐろり古雛
囀を集め裏山膨らめる
切口の匂ふ切株木の芽風

春光や池に浮く鳥潜る鳥

小魚の風に干さるる春の浜
ふくらみを風の促す牡丹の芽
ゆるやかに曲る堤や草萌ゆる
紅梅を映すや園の水明り
茶の席の外つ国の客梅真白

横浜 遠藤清子

根深汁古き杓子も母の味

野水仙盛る堤や通学路
稜線を茜に染むる春夕焼
春昼や散歩の道を少し変へ
軽やかに席をゆづられ春日和
落椿夕日に映ゆる坂の道

横浜 斉藤雅子

横須賀 福田禎子

横浜 赤塚篤子

池の辺の白き茶寮や幣辛夷
船着場針先ほどの柳の芽
啓蟄や空の青さとちぎれ雲
渡し場や風と光と柳の芽

人逝くや春の闇裂く救急車
桜草スキップしたる女の子
春疾風主婦入院の一大事

豆雛飾り茶亭の大鉄瓶
音もなき芽吹き雨や段葛

病窓の夜景きらめく春霞
花だより快復祈る同病者
矢絰や袴姿の卒業生

横浜 竹内涼子

横浜 榊山智恵

春浅き街の電柱尋ね猫

十字架や初鶯の声高き

ひともとの椿かがよふ花のかず
荒荒しくついでむ鳥や白椿
九九の声洩るる学舎ひこばゆる
糠雨の馬酔木の花や千社札
旋回の夕さりの池鳥帰る

春めくやチヨークのメニュー店先に
鈴音の絶えぬ境内梅まつり
緋毛氈の床几に休む梅日和
鶯の声仰ぎたる一樹かな
転た寝のまま暮れゆくや春の風邪

耕 土 集

森清 堯選

若草やカスネツトは風を打ち
川崎 太田 利明

マネキンの新しき服春の風
庭の花匂へど蜂の来ぬ日かな
校門に見送る教師風光る
降り立てば梅のかをりや臨時駅

横須賀 久保寺真佐子

白梅を見上ぐる瞳日のやはら
横浜 秋山 文字
廢屋や三桧の花色さして
朝明けの風の尖りや犬ぶぐり
夫と子と孫に囲まれ喜寿や春
巧みなる刺繡の嬭梅香る

下萌えや畦に轍の多くなり
下萌えや木洩れ日淡き袖の道
指先にうつる香やよもぎ摘み
ふきのたう身の丈に合ふ粗衣粗食
もみぢ手の赤きべべ立ち雛の間

横浜 宮崎他異雅

モノクロの空へ向かひて鳥帰る
川崎 堀江 久子
強風に踊るカルメン春の薔薇
道の辺を一人占めなるはこべかな
幼児の片言まじり春の風
若き日の捨てきれぬ夢花辛夷

手袋を外し本取る佳人かな
実感の離るる季語や春立ちぬ
終ハスを逃し味はふ夜半の春
青き踏む膝の痛みの無かりけり
仰ぎみるランドマークや風光る

横浜 友田 悠子

片言に耳傾けぬ今朝の春
横浜 市川 夏子
梅満ちて空一枚を捉へけり
雛飾る寝耳に水の良き知らせ
啓蟄や土塊解す庭仕事
小流れの小さき水音芹の丈

厨事の弾む心や風邪癒えて
鯛焼屋の手際に見惚れ異国人
朝取りの鮎子煮るや大わらは
仏めく顔となり古雛
筆塚や雨に散り行く白き梅

遊蝶花

小川 玉泉

(名誉顧問)

鶯や目覚めを誘ふ声清し
鶯の庭に来てをり聴きすます
木隠れに経読み鳥や朝ぼらけ
黄に赤に鉢に押し合ふ遊蝶花
たちまちに岬を越えぬ帰る鳥
隣との境に白き八重椿

雑記帳 23

この号の手元に届く頃は、新しい年号に変わっているはずである。筆者は昭和、平成、を丸々生きてきたが、此の先は、ますます不穏さがつのる恐れを禁じ得ない。俳句を大切にしたい。